

南方熊楠初期英文論文の周辺

—— 関連資料解説 ——

松 居 竜 五*

The Background to Minakata Kumagusu's English Essays

Ryugo Matsui*

Minakata Kumagusu contributed altogether fifty papers to *Nature* magazine published in London. Many of them are related to other papers published in the magazine, and they often promote and develop discussions. Four typical topics concerning such essays of Kumagusu are thus analysed in this paper; the Constellations of the Far East written in 1893 as Kumagusu's first contribution to *Nature*, works concerning folklore of bees and wasps written during 1894-1898 inspired by the work of Russian entomologist Osten Sacken, works on finger print method which were initiated by criticism to a paper of a British colonial officer who claimed himself as the inventor of finger-print method, and correspondence with Arthur Morrison concerning Kumagusu's English writings. First hand materials, articles mainly in *Nature*, and correspondence related to his papers found in Minakata's residence, are also presented.

ここでは、南方熊楠の『ネイチャー』系統の論文について、関連資料を踏まえて分析を行うことにする。本文では、主に熊楠の初期の英文論文のうち、特に重要なものを挙げながら、誌上での議論など、それらが書かれた背景について探る。また、英文資料篇では、『ネイチャー』誌上での関連論文その他の資料、および南方熊楠旧邸に残されたマニュスクリプト資料を紹介している。

英文資料篇で紹介した資料は以下の通りである。

- 【資料①-1】 「東洋の星座」関連資料
- 【資料②-1~8】 オステン・サッケンとの共同研究関連資料
- 【資料③-1】 「拇印考」関連資料
- 【資料④-1~8】 アーサー・モリソンから南方熊楠宛書簡

南方熊楠の英文論文に関して、すでに筆者は何度か論文をまとめており、また現在編集作業が進行中で、2004年度中に刊行予定の『南方熊楠英文論考翻訳（仮題）』の中でも、解説のかたちで論じる予定である。そこで、英文論文の内容自体に関してはこうした著作に譲り、ここではあくまで熊楠論文の背景となったさまざまな人物との交渉を、一次資料から再現することに努めたい。

ノーマン・ロッキヤーと南方熊楠

『ネイチャー』は1869年、ノーマン・ロッキヤー (Norman Lokyer) によって、英国ロンドンで

* 龍谷大学国際文化学部助教授

創刊された週刊科学雑誌である。ロッキヤーは、日食の際の太陽光のスペクトルの研究からヘリウムの存在を発見した天文学者で、国際間の科学者の情報交換の必要性を唱えて『ネイチャー』を発行した。以来、1920年に亡くなるまで、50年以上にわたってその編集長として君臨しており、南方熊楠がロンドンにいた1890年代はまだまだ壮健であった。1885年には、王立科学院において、世界で最初の天体物理学教授に任命されている。

1890年に入ると、ロッキヤーは天文学の古代遺跡への応用という分野に関心を持ち始める。すなわち、彼はギリシアを旅行した際に神殿の多くが南東の同じ方角を向いていることに気づき、これが当時の日の出の方向と一致するのではないかという仮説を立てた。そして、古代エジプトの遺跡が太陽とシリウスの観測のために使われていたことを発見して、1894年に『天文学の夜明け』(*Dawn of Astronomy*)と題する本の中でこの説を展開している。また、英国内の古代遺跡であるストーン・ヘンジも天体の観測に使われていたという考え方に基づいて、地軸の移動からその年代を割り出すという研究をまとめている。この間、自らが生み出した『ネイチャー』誌は発展を続けて、今日の世界でもっとも権威のある科学雑誌としての地位を確立していった。

南方熊楠が『ネイチャー』誌を初めて手にしたのは、おそらく20歳でアメリカに渡って以降のこととて、旧邸書庫に残された蔵書の中では、1888年8月16日号がもっとも古い号である。蔵書としては、1888年分3冊、1889年分9冊、1890年分18冊が残されていて、アナーバー時代の熊楠がアメリカの科学雑誌『ポピュラー・サイエンス・マガジン』や科学叢書「フンボルト・ライブラリー」などとともに、この雑誌をよく買って読んでいたことがわかる。この頃の熊楠は、主に読書とともに、アナーバーを流れるヒューロン川の河岸で植物採集をすることが多かったのだが、以下の日記の記述からは、『ネイチャー』購読の理由の一つが、そうした植物学への関心から来たものであったことがわかる。

今年四月十八日のネイチュール五百九十二枝にて *Campanula batula* の白花を圧搾するとき
は莖草色に変ずる旨をしるせり。(1889年6月9日)

アナーバーにいた熊楠にとって、『ネイチャー』は英国の自然科学の水準の高さを教えてくれる雑誌であったかもしれない。その後、熊楠はフロリダ・キューバを経てニューヨークから船に乗り、大西洋を越えて1892年9月にロンドンに到着した。そして、一年後の1893年10月に「東洋の星座」によって『ネイチャー』にデビューすることになったのである。

この熊楠の処女作「東洋の星座」は、同年8月17日号の読者投稿欄に掲載されたM・A・Bという人物の質問【資料①】に答えたものである。この質問状は、「アッシリア人、エジプト人、ギリシア人、ペルシア人、……中国人、ポリネシア人、ヒンドゥー人、アフリカ人、アメリカ先住民」という民族名を挙げつつ、それぞれの現在の星座の状況を問うていた。さらに、最後に「もしそれぞれの民族が独自のグループ化による星座を用いているのならば、それらを各民族や国々の近親性を判断するために使えないものか」と締めくくっており、星座の作り方を民族学的な方向に活かさないかという提案を行っている。

ただし、M・A・Bの文章自体はやや稚拙な印象を抱かせるもので、最後の提案も「近親性」という言葉が人種的なものを意味しているのか文化的なものを意味しているのか、はっきりしない。しかし、二十六歳の東洋からやってきたばかりの青年南方熊楠にとっては、この問いの漠然としている部分こそが、逆に自由な観点から応答できる余地を残すという意味での利点となったと考える

ことができる。熊楠は、この質問を見て「予、其最後二条に答んと起稿す」と、即座に回答を志し、二週間後の8月30日に「ネーチュールへの答弁稿成」とその完成を記している。

そのようにして古代インドと中国の星座を比較した「東洋の星座」は、結果的に大きな成功を収めることになる。熊楠自身が『タイムズ』以下諸新紙に批評出て大いに名を挙げ（全集7巻13頁）と誇っている事実については未だに消息がつかめないが、第二作の「動物の保護色に関する中国人の先駆的発見」Early Chinese Observation on Colour adaptation が早くも翌週の読者投稿欄に掲載されたことなどは、第一作への高い評価を受けてのものだったのであろう。この後、熊楠が投稿するほとんどの論文が掲載されていることや、そのおかげで1899年の『ネイチャー』30周年特集号に、伊藤篤太郎と並んで“Special Contributor”という、まさに「特別寄書家」に選ばれていることなど、異例の厚遇と言っても過言ではないだろう。

もちろん、これは若くして和漢の文献に通じ、英語での学術的表現もアメリカでの研鑽の成果としてかなり高いレベルで可能であった南方熊楠という人物自体に対する評価であることに間違いはない。しかし、デビュー作の「東洋の星座」に限って言えば、詰めが甘く、学問的に的確とはいえないこの論文が掲載され、少々過大に評価されたことにはやや疑問点も残る。やはり、そこには古代諸民族の天文学に並々ならぬ関心を抱いていた編集長、ノーマン・ロッキヤーの影響力ということが何となく感じられるのである。

ロッキヤーの天文考古学に関する最初の作品『天文学の夜明け』は、翌年1894年に出版されているのであるから、熊楠が「東洋の星座」を投稿した際には、すでに多くの資料を集め終え、場合によって本論もかなりの部分が完成していたのではないかと考えることができる。『ネイチャー』誌におけるロッキヤーの創刊者としての存在の大きさを考えれば、M・A・Bの質問から熊楠の回答までの流れを、彼が知らなかったことは考えにくい。実際に熊楠論文の掲載を後押ししたかどうかについては確定できないものの、何らかの影響力を持っていたと想定しないわけにはいかないのである。

このことは、おそらく熊楠の側の『ネイチャー』への関わりを考える上でもヒントを与えてくれる。後に「東洋の星座」は『ネイチャー』に載った天文学に関する懸賞論文で一等を取ったものであると、伝説的に語られることになる。これは、南方植物研究所のための趣意書に書かれたのが最初のもので、近年まで熊楠のロンドンでの活躍を語る上で欠かせない逸話であった。もちろん、「東洋の星座」は読者投稿欄に載ったものなので、字義通りに取れば、単純に誤りであると断言することができるだろう。筆者もこうした伝説の誤りを正そうとしてきた一人である。

しかし、外面的な事実は事実として、ロッキヤーとの関係からこの間の事情を推測すると、多少違った視角を考えることもできる。つまり、もし仮に、M・A・Bの質問に対してどのような回答が寄せられるかを、同様の関心を持つロッキヤーが注目していたとしたら、そして東洋から来た青年のインドと中国に関する論文の登場を彼が心から喜んだとしたら、少なくとも『ネイチャー』という雑誌内部の力学からすれば、編集長の基準から見た新人賞の受賞というような雰囲気があったことも十分に考えられるのである。熊楠はこの後、ロッキヤーと個人的に面識を持ち、「在英中世話になったノルマン・ロッキヤー男」（全集5巻568頁）とまで記すようになるので、そうした「東洋の星座」掲載の経緯を聞かされていた可能性もある。伝説を再生産するのではなく、事実に基づいて新たな角度から考え直すという意味で、こうした見方を提案しておきたい。

さて、熊楠はその後、1897年11月と1898年12月に起こした騒動によって大英博物館から追放されるのだが、この時ロッキヤーに仲裁を願い出たようである。しかし、もともとその追放は、博物館内外でさまざまな騒動を起こしていた熊楠の自業自得という側面もある。ロッキヤーもそこまで助力はできないとばかりに、「君の最初の手紙は混乱していて私にはよく事情が理解できない。手紙は自分で理事会宛に出した方がよい」という返事を寄越している。熊楠も日記に「サー・ノーマン・ロッキヤールより状あり、博物館の件に付デキンス氏と相談せしとのこと、申状は予より出すべしとて送附さる」と書いている。ある意味ではロッキヤーの厳格な判断は正しかったわけで、「ロッキヤーは小生も会いしことあるが実に倨傲無比の老爺なり」（全集別1巻63頁）という熊楠に寸評された頑固さの面目躍如と言えるかもしれない。

オステン・サッケンとの共同研究

さて、『ネイチャー』の誌上を通じて熊楠は自らの学問活動の範囲を広げて行き、そのいくつかは共同研究のかたちを取るようになる。ロシア貴族の昆虫学者オステン・サッケンとの書簡でのやりとりも、そうした誌上を離れて発展していったものの一つであった。

まず、このやりとりは、オステン・サッケンが1893年12月の『ネイチャー』誌に送った質問状【資料②-1】に始まる。『イタリア昆虫学会紀要』（*Bolletino della Societa Entomologica Italiana*）に発表した論文「いわゆる古代のブーゴニア伝説について」（*On the so-called Bugonia of the Ancients*）の補足資料を得るために、オステン・サッケンが『ネイチャー』の読者に対して協力を呼びかけたものであったが、これに答えたのが南方熊楠である。

オステン・サッケンは、質問状の中で「東洋文学の研究者で、次に挙げる俗信の例と明らかに一致する文献を見たことのある人はいないだろうか」と、東洋の知識も求めたい旨を明言していた。これに対して熊楠は、『ネイチャー』（四九巻一九八頁）に掲載されたオステン・サッケン男爵の記事を見て、東洋におけるハナアブの俗信に関する文章をいくつか紹介したいと思い、私は折りに触れて自分のわずかな東洋文学の蔵書を探索してみた」と、「蜂に関する東洋の俗信」*Some Oriental Beliefs about Bees and Wasps*と題する論文において応えたのであった。

実際にはこの時の熊楠論文は、おおむね中国と日本における蜂に関する一般的なフォークロアの紹介が中心であって、オステン・サッケンの論点に完全に回答しているわけではない。オステン・サッケンの説の中心点は、『旧約聖書』の中でサムソンが牛から蜂が生まれるのを見たと言われているのは、死骸にたかるブンブンを蜂と混同したためであるという部分にあった。「蜂に関する東洋の俗信」の中でこれに直接関連する資料は、六つ挙げられたフォークロアのうちの5の部分の「長沙で、針のないミツバチを見た。掌にのせて弄んでも、まったく無害であった。蠅と変わるところがなく、何とも不思議な話である」という『五雑俎』からの引用のみであった。

しかし、これに対してオステン・サッケンから謝礼の手紙が来たことが、熊楠の5月16日付けの日記から見て取れる。すなわち、「タハイデルベルヒのバロン・オステン・サッケンより来書。予がネーチュールに出せるブン〜虫の事を謝し、並に謝在杭の事実等を問はる」というのである。これに対して熊楠は早速翌5月17日に「バロン・オステン・サッケンへ状二本出す」と返事を返している。これをきっかけとして二人の文通が開始されており、特に1894・1895の両年には何度かの応答があったようである。残念ながら熊楠からオステン・サッケンへの手紙の行方はその後わから

なくなっているが、オステン・サッケンから熊楠宛については、和歌山県田辺市の旧邸に7通の存在が確認されている。それぞれ、1894年6月18日【資料②-2】、同9月26日【資料②-3】、同10月26日【資料②-4】、同11月5日【資料②-5】、1895年2月20日【資料②-6】、同8月13日【資料②-7】、1898年5月16日【資料②-8】の日付のあるものである。

これらの書簡の中では、熊楠は東アジアの昆虫関係のフォークロアに関するさまざまな文献を紹介し、オステン・サッケンはその博学に驚嘆するとともに感謝の念を示していることが読み取れる。たとえば、試みに現存する最初の書簡を全訳してみよう。

ハイデルベルク、1894年6月18日

親愛なる貴兄へ

六月七日付けの貴兄の親切な手紙がちょうどいいタイミングで到着したおかげで、私はへまをせずにすませることができました。第二版の原稿はすでに印刷屋に行っていますが、中国の牛についての文章を変更することは間に合います。また、貴兄の以前の書簡の中にも興味深い部分がたくさんありました。「九牛の一毛」などは、まったく優れた表現で、西洋の読者に紹介するに値するものです。

抜刷を送れなくて、貴兄にはどうも申し訳ないと思っています。しかし、私はあまりに気前が良すぎたために、新しいものは二冊しか残っておらず、それらは自分用に取っておきたいのです。第二版が出来次第、かならず貴兄に一部送ります。第二版は初版の二倍の量で、多くの点でより網羅的で満足のいくものになるはずです。

あらためて心よりの感謝とともに 貴兄の忠実な C・R・オステン・サッケン

この手紙の二ヶ月後、オステン・サッケン男爵はロンドンの熊楠の下宿を訪れている。この時の訪問は、部屋のあまりの汚さに老男爵が出されたお茶も飲まずに逃げ出した、という伝説とともによく知られているが、熊楠の日記を見ると「茶少しのみ」という記述になっていて、たしかに男爵はあきれた様子であったのではないかと想像させるところである。

さらに熊楠はこれらの書簡の中で、中国においても、ハナアブ（ブンブン）とミツバチが混同されていたことを、示唆している。これは、オステン・サッケンの文脈に直接合致するものであり、この共同研究の最大の成果と言えるであろう。オステン・サッケンの「古代のブーゴニア伝説について」は前記の書簡のように大幅に改訂された後に1894年に第二版、1895年に第三版が出版されるのだが、特に第三版には熊楠の説が大々的に紹介されていて興味深い。そのあたりの経緯を、オステン・サッケン自身は同書の中で次のように記している。

拙著『牛から生まれた蜂』（一八九四）の出版の後、筆者と書簡交換を重ねてきたロンドン在住の日本人研究者南方熊楠氏は、中国及び日本の文献に見られる *Eristalis tenax* [ハナアブ] について蜂との関係という視点から多くの新たな興味深い事例を報告してくれた。私は南方氏がこの問題の研究を通してこれまでに得た成果をここにまとめて紹介することが有益ではないかと思うのである。

こうして、オステン・サッケンは陶弘景、李時珍、貝原益軒、寺島良安などに関する熊楠書簡の引用を数ページにわたって続けている。「貴兄の送ってくれた情報はほぼすべて出版したい」という入れ込み方であった。そして、オステン・サッケンは熊楠に対して「貴兄がいなければこうした興味深い事実はこの先ずっと知られることがなかっただろう！」という最大限の献辞を与えている

【資料②-6】。

一方、熊楠の方はハイデルベック他のドイツの生物学者を紹介してほしいという依頼をオステン・サッケンに行っていたことが書簡からは読み取れる。

「拇印考」をめぐる論争

こうした共同作業とはうって変わって、もともと論争好きである熊楠の英文論文の中には、誌上での議論を真っ向から批判するかたちで投稿されたものもある。当時西洋に導入され始めていた、指紋による身分証明という問題を扱い、1894年から1895年にかけて書かれた「拇印考」連作はその典型とも言える論文と言えよう。ここで熊楠は拇印制度は自分の発案で西洋に広めたものだとするウィリアム・ハーシェルの主張を論駁し、東アジアにおける拇印の歴史がいかに古いものであるかを論じている。

ハーシェル（有名な天文学者の同名の孫）は、インドで植民地行政を行っていた際に、身分確認の手段として拇印を実行したところ大きな効果があったとする報告を、まず1880年に短文で『ネイチャー』誌上に掲載した。しかし、1894年の『十九世紀』誌にスピアマンという人物が、拇印制度はもともと中国で発展したものであるという説を発表したために、自らのプライオリティーを証明しようと再び1894年11月22日号の『ネイチャー』に「拇印」(finger-prints)と題する文章【資料③-1】を掲載している。この文章の中で、ハーシェルはかなり激しい口調で、自分こそが拇印制度の導入者だという説を声高に主張する。

この機会に、最近の人体測定学の論文（『十九世紀』1894年9月号）に記された「拇印はもともと中国で発明された」とする主張を、私の知る限りではまったく根拠のないものとして批判しておきたい。私は、このことを裏付けるどんな証拠にも、いまだかつて出会ったことがない。実を言えば、私はこのやり方を、P & O社の蒸気船モンゴリア号がインド洋から外洋に向けて航海している際に、乗客と乗組員の前で披露したことがある。今でも船長以下、その船にいわせたすべての人々の指紋が、それぞれの名前とともに取ってある。乗客の間でまたたく間にひろまったこのアイデアが、このルートを通じて中国のどこかの港に落ち着き先を見つけ、実行されるようになったというのにはあり得ることである。しかし、これが真相であろうがなかろうが、拇印が古くからあるということに関する満足のいく証拠が提出されないかぎり、中国人の肩を持つあいまいな主張に対して、私は抗議をしなくてはなるまい。

こうしたハーシェルの強引な主張に対して、1895年12月27日号に投稿された熊楠の論文「拇印考の古さについて」は、中国、日本、インドの例を引きながらきっぱりとした論駁を行っている。のっけから「スピアマン氏（Mr. Spearman）が何に基づいてこの説を立てたのかは私にはわからないが、いくつかの文献から中国人発明説を裏付けられると思われる証拠は収集してある」と宣言する熊楠は自信満々である。

こうした宣言とともに、熊楠は江戸時代に「爪印」や「血判」が用いられていたこと、また大宝律令やそのモデルとなった中国の永徽律令に拇印制度が書かれていることなどを次々に紹介していく。結局、ハーシェルの俗説が間違いであることを、当時の日本人にとっては常識に近いと思われる事実を一つ一つ挙げることで証明しきったと見てよいであろう。当時オランダのライデンで発行されていた『国際民族学報』*Internationales Archiv für Ethnographie* には、「ハーシェル氏の奇妙な

説」に対して、熊楠が東洋における拇印の古さについて論証した、と明確な判断を下している。しかし、熊楠のこの論文は、最後の方で古代中国の手相について語り始め、やや混乱している気味がある。『国際民族学報』は、全体としては熊楠の論旨を認めながらも、次のような批判も同時に行っている。

東洋人は古くから拇印という習慣を用いてきたとする点では、南方氏の指摘は確かに正しい。しかし、同じ形が別人にもあらわれ得る手相見の際の印と、一個人に一つしかないことから身分証明として書類に押される拇印という二つの違ったものを混同している点で、氏は誤りを犯している。

この論評に関しては、南方熊楠の日記の1896年2月1日の項目に「レイデン府 Archiv fur Ethnographie 編輯者シュメルツ氏より、予一昨年十二月二十七日ネーチュールに出せし指印考の評おくらる」とある。つまり、熊楠がこれを受け取ったのは一年以上後のことであつた。その後、熊楠はライデンの東洋学者グスタフ・シュレーゲルと感情的な論争を戦わせることになり、シュメルツもどうやらそれに巻き込まれた気配がある。

結局、熊楠は1899年になってシュメルツの批判に対して、これを論駁しようという決意で書簡を送っている。「状一、オランダ国シュメルツに出す。千八百九十四年予の拇印論を氏がアーキブに出せしを駁せんとする故、其後なにも異論なきか否を聞んとす也。」(日記1899年6月)しかし、これに対する反応は特になく、熊楠は英国を離れることになったようである。

アーサー・モリソンと熊楠

この熊楠のシュメルツへの手紙に関連して、熊楠を強力にサポートしていたのが、友人で作家のアーサー・モリソン (Arthur Morrison) である。次の書簡は熊楠の拇印考と、シュメルツの批判に関してモリソンが書いたものと思われるが、熊楠の英文を称賛する一方、相手 (おそらくシュメルツ) の意見は英語の用法に関する能力不足から来ていると明言している。

1899年6月13日 ラフトン

親愛なる南方氏へ

- (1) 拇印に関するあなたの『ネイチャー』宛の論文は、知的な英国人であれば誰でも完全に明瞭に理解できるものです。
- (2) 貴書簡に添付された梗概はあまりよくできていません。多くの面で重要な考察がなされておらず、またいくつかの箇所の意味が間違っています。ここで付け加えておきますと、こうしたミスが起こる理由は想像がつきます。これは、貴兄の文章に明瞭さが欠けているために起こるものでも、また相手の側に悪意があるから起こることでもありません。私にはこれは単に、相手の人物が外国人、それもおそらくドイツ人で、英語の意味の正確さにおいて貴兄に及ばないというのが実際のところだと思われます。その結果、似てはいるけれどまったく同じ意味ではない二つの単語について、彼にはその差異がわからないために、両方とも間違いに気づかないままに使ってしまっています。英国人から見れば、言語に関する知識が不十分な外国人の文章は、このくらいの精度でかならず気づくものなのです。
- (3) 貴兄の論文中には、特に二つのものを混同した部分はないように思います。手相の問題が

取り上げられているのは、中国人が非常に古い時期に指紋に注意を払っていたこと、そしてそうした模様が一生変わらないと考えたり、実際に確かめたりしたということを示すためとわかります。もちろん貴兄は、手相に関連して、指紋の価値についてなど何も言っていません。そうした混同は、注釈者の方の問題です。

おそらく、「手相はここで問題になっているものとは何の関係もないが、それでも事実としては」などなどとやることで、性急な誤解を防ぐべきだったかもしれません。しかし、さっき書いたように、貴兄の意味するところは教育のある英国人には完全に平易なものなのですから、そんなことはまったく必要ないのです。“perceive”と“conceive”についての貴兄の使い分けは正確で、たいへんわかりやすいものです。

“valuable”という語はご想像の通りの傾向があるため、これをお使いになると、おっしゃる通り、読者は貴兄が手相を実際に信じていると考えてしまう可能性がゼロではありません。しかし、分別のつく英国人ならば、この梗概の全文が外国人によってぎこちない書き方をされたものであることを理解し、書き手がそこまで気づかなかったものとして、厳密な意味を求めることはしないでしょう。

貴兄の文章の意味をこのように誤解していることは、厳しい言葉で言えば「曲解」であると言えるでしょう。この場合には、ご説明したように、注意が足りなかった、あるいは気づかなかったか、拙速であったことに起因しています。しかし、もしこれがわざと、意識的なものであったら、さらにつよい表現である「意図的な曲解」があなたの論文に加えられた、という言葉を用いてよいでしょう。これはたいへんつよい表現で、紹介者の側に明かな憎悪と悪意が認められる場合のみ使ってよいものです。「不注意による曲解」という言葉もかなり厳しいものですが、「意図的な曲解」ほどではありません。もう少しおだやかな表現だと、「予期せぬ曲解」とか「意図に反する曲解」があります。

敬具

貴兄の誠実な アーサー・モリソン

貴兄の論文に若干の指摘をしたいと思います。貴兄の言わんとすることを表現するためには、「The Japanese person has, or at least I myself have (日本人の方々、すくなくとも私自身は、精神的な信念を持っています)」としてそれぞれの文に適切な動詞を与えるのがもっともよい方法でしょう。第一文は一人称、第二文は二人称で書かれていますから、同じ動詞で両方にかけるのはよくないと思います。

アーサー・モリソンは、特に学歴を持つわけでもない一市民であったが、1894年に出版した『貧民街の物語』(Tale of Means Street)や1896年の『ジャゴの子供』(A Child of Jago)でロンドンの下層社会を描いて好評を得、作家として認められるようになった。1894年から始めたマーチン・ヒューイットを主人公とする探偵小説は人気を博し、当時はシャーロック・ホームズのライバルと呼ばれたほどであった。また日本美術のコレクターでもあり、熊楠とはそうした縁で知り合ったのではないかとと思われる。

モリソンは1863年生まれだから熊楠よりは4歳年上で、いろいろな面でたいへんよく面倒を見てくれる兄貴分であった。気取らない人柄で、熊楠は日本に帰国するまでモリソンが有名作家である

ことに気づかなかったくらいである。熊楠の英語の文章を丁寧に添削してくれたようで、上記の手紙にもそうした心遣いがはつきりとあらわれている。熊楠の英文を高く評価していたことが、次の述懐からもわかることである。

この人、平生小生の英文を見、ロンドンにある外人中、貴公ごとく苦辛して英文を書くものはあるまじ（これは小生一文を作るに、必ず字書をしばしば見、なるべく同意味の語に異文字を多くつかうなり。かくせざれば長文は人が見あくなり）、今十年も修煉せば大文章家となるべし。マクス＝ミュラーなど学問はえらいが、英文は軽忽にかくゆえ熊楠の文ほど煉れておらずとて、その例を示されし長文の状、今も保存す。これはお世辞として半分に聞かれんことを望む。（全集8巻437－438頁）

熊楠が「今も保存す」とここでも書いているモリソンの手紙とは、上記の1899年6月13日書簡のことのように思われる。ただし、マックス・ミュラーのことは書かれていないので、これは熊楠がいくつかの話を組み合わせたものかもしれない。いずれにせよ、熊楠の『ネイチャー』への投稿論文を考える場合に、こうした名文家を添削者として持てたという幸運も、考慮に入れる必要があるだろう。

熊楠は、生涯を通じて独立独歩、しばしば孤独な時期を過ごした人物であった。しかし、彼がロンドンで得た数々の友人は、学問・生活の両面で大きな影響力を熊楠に対して持っていたことがわかるのである。

英文資料篇

【資料①】

The Grouping of Stars into Constellations.

Can you or some of your readers kindly give me an answer to the following questions, or tell me where I may obtain information on the subjects?

Did the Assyrians, Egyptians, Greeks, and Persians group the stars in the same manner into constellations? In cases where they did so were the constellations usually named by all the nations after the same animals?

How were the constellations, which we call after Greek heroes, named by Assyrians and Egyptians?

Do the different races of the present day, Chinese, Polynesians, Hindoos, Negroes, Americans, &c., each group the stars in a peculiar way?

If each race has its own plan of grouping the stars can we make use of this peculiarity in ascertaining the affinity of various races and nations? M. A. B.

Terriers Green, High Wycombe, August 11

【資料②－1】

On the Bugonia-Superstition of the Ancients

Last August, I published in the Bulletin Soc. Entomol. Italiana, 1893, p. 186-217, an article entitled "On the Bugonia of the Ancients, and its relation to Eristalis tenax, a two-winged insect." I

desire to collect some more materials on that subject, in view of a second edition, and I would be very grateful to readers of NATURE who may be able to give me assistance in that matter.

The information I require may be expressed in two questions:

- (1) Whether travelers in out-of-the-way places in Europe or Asia have not come across vestiges of the superstition about oxen-born bees, still lingering among primitive people?
- (2) Whether readers of Oriental literature have not come across passages evidently referring to this superstition, like the passage I reproduce here as an example. I found it in the "Golden Meadows" of the Arab traveler Massoudi (died in Cairo, 955), translated by Barbier de Meynard and Pavet de Courteille, Paris, 1861, vol. III. p. 233. It relates a conversation which took place in Arabia, and of which this is a fragment. "Had the bees, which produced this honey, deposited it in the body of a large animal," asked Yiad? The surveyor answered: 'Hearing that there was a hive near the sea-coast, I sent people to gather the honey. They told me that they found at that place a heap of bones, more or less rotten, in the cavity of which bees had deposited the honey that they brought with them.'"

I have sent separate copies of my paper to the Geographical, Linnean, and Entomological Societies in London, to the Natural History Museum, South Kensington, to the Athenaeum Club, and to many friends in England. I should be happy to send a copy to anybody interested in the subject.

C. R. Osten Sacken

【資料②— 2】

Heidelberg, June 18 1894

My Dear Sir,

Your kind letter of June 7 came just in time to save me from a blunder. My MSS. of the 2d edit. was already in the printers hands, but it was not too late for changing the passage about the cattle in China. Some of your other communications I have also introduced. "But a hair out of nine oxen" is an excellent expression which deserves to be introduced into Western literature.

I feel very guilty towards you in not having sent you a copy of my pamphlet yet. But I have been too profuse with it, and have nothing left but two clean copies which I want for my library. As soon as my 2d edit. will be out, I shall send you a copy. It will be double the size of the former, and more complete and satisfactory in many ways.

With renewed most cordial thanks.

I remain very faithfully yours

C. R. Osten Sacken

【資料②— 3】

Heidelberg, Sept 26 1894

My dear Sir,

I am very much obliged to you for your very kind letter of Sept 7. I shall take note of all your

remarks and communications in order to incorporate them in a new Supplement, which I intend to publish as soon as I have enough material for it. Your communications about Eristalis in China and Japan are so interesting, that they deserve to be treated in a separate chapter. Everything you may send me in future will be received most gratefully.

As the wintercourse of studies has not been opened here yet, I have not had occasion to meet Prof. Askenasy, the botanist. I frankly confess that I have little hope that he may be able to be of any use to you. All the Professors here have a great deal of work to do, and are both to undertake anything from the outside. Could you not find a botanist in Kew who might be of use to you?

Very faithfully yours

C. R. Osten Sacken

【資料②-4】

Heidelberg, Oct 26 1894

My dear Sir,

I have seen Professor Askenasy and spoken to him of your desire to have determinations for your south-American fungi. He told me that I was under a wrong impression when I thought that fungi were his speciality. He studies algae and not fungi. He told me that the specialist for fungi in Germany was Professor Paul Magnus in Berlin, Blumeshof 15. He promised me to write to him about you, but in the mean time, I deem it useful to send you the name and address of the Berlin Professor, in order to enable you to communicate with him.

In one of your letters you spoke of a possible third edition of my paper on Oxen-born bees. That third edition is very problematic yet, but in the mean time I shall publish short separate papers as supplements, as soon as I acquire new material. So I have read over all your letters, and composed a connected account of all the information contained in them, with an expression of my grateful feelings for the service you have rendered science. And I hope soon to publish this paper as a Supplement XII, entitled; Eristalis tenax in Chinese and Japanese literature.

With my best wishes for your health during the coming winter, I remain very sincerely yours

C. R. Osten Sacken

【資料②-5】

Heidelberg Nov. 5 1894

My dear Sir,

I have received your very kind letter of Nov. 5, and have seen Prof. Askenasy about the "algae." He told me he would be most happy to determine algae for you, and he added he had just received an answer from Prof. Magnus in Berlin. The purport of it is that even the fungi are subdivided in specialities, cultivated by different men. For large fungi Hymenomycetes, there is the Abbot Bresadola in Friest. For Ascomycetae, there is Prof. Rehn, in Regensburg, Bavaria. Magnus' specialty consists in the small, parasitic fungi (Uredinae etc). "But, adds Prof. Magnus, if Mr. Minakata wants

merely determinations of fungi, why does he not apply to Messrs Massee and Cooke, who live in London? They will easily do it for him, the more so that they have large material from tropical America for comparison."

Thus far Prof. Magnus. Prof. Askenasy you can address simply to the University, Heidelberg.

Very sincerely yours

C. R. Osten Sacken

I shall take good care to make use of the data communicated in your letter.

【資料②- 6】

Heidelberg, Febr. 20 1895

My dear Sir,

I take pleasure in sending you today the condensed account of all your communications to me about the occurrence of Eristalis in the literature of China and Japan. If I remember right, I had told you in one of my letters that I intended to publish such an account, but the publication has been delayed longer than I expected. I hope that it will appear satisfactory to you, and that you will not discover too many blunders in it. At the same time allow me to repeat to you in private, the expression of gratitude, which you will find expressed publicly in my paper. Without you, so many of these interesting facts would probably have remained unknown for a long time to come!

I hope you have not suffered from the very cold winter too much. It has been very long and hard here, and begins only to relent now.

You will do me a favor by letting me hear of you soon!

Very faithfully yours

C. R. Osten Sacken

【資料②- 7】

Heidelberg, Aug 13 1895

My dear Sir,

I take pleasure in sending you my "Additional notes," which, I think, will justify what I say about them on p. 4; "with the present publication, I consider the task I have undertaken etc., as fulfilled."

The Spanish reference which you were kind enough to send me July 23, is founded upon Redi's work, and contains nothing new to me. The observation of the learned "Sperling" or "Sperlingius" is borrowed from Redi, and you will find it mentioned in my work on p. 61.

The existence of a folklore like the Bugonia in the East Indies, as I remark on p. 23, is dependent on the existence there of E. tenax. The first thing to do, therefore, would be to ascertain that fact.

With my renewed heartfelt thanks for the trouble you have taken in helping me to elucidate the truth, and with my best wishes for your well being,

I remain very faithfully yours

C. R. Osten Sacken

P. S. Although I had called the attention of the printers to the right position of the wood-cut, they have put it upside down. I suppose it does not matter much, but, at any rate, it was not the effect of my negligence.

【資料②— 8】

Heidelberg, May 16 1898

My dear Sir,

This moment I receive your letter of the 14th and shall make the necessary application to the editions of "N." immediately, and report to you about the result. My heartfelt thanks for your continued interest in my work, notwithstanding the misfortune which has befallen you.

Yours very sincerely

C. R. O. S.

【資料③— 1】

Finger-prints

I have been quite unable, since I saw Mr. Faulds' letter in your issue of October 4, to take the matter of it in hand hitherto; and I do so now only because I think Mr. Faulds is entitled to raise the question if he pleases. To the best of my knowledge, Mr. Faulds' letter of 1880 was, what he says it was, the first notice in the public papers, in your columns, of the value of finger-prints for the purpose of identification. His statement that he came upon it independently in 1879 (?1878) commands acceptance as a matter of course. At the same time I scarcely think that such short experience as that justified his announcing that the finger-furrows were "for-ever unchanging."

How I chanced upon the thing myself in 1858, and followed it up afterwards, has been very kindly stated on my authority by Mr. Galton, at whose disposal I gladly placed all my materials on his request. Those published by him are only a part of what were available. (See his "Finger-Prints," page 27, and his "Blurred Finger-Prints") To what is there stated I need now only add, at Mr. Faulds' request, a copy of the demi-official letter which I addressed in 1877, to the then Inspector-General of Jails in Bengal. That the reply I received appeared to me altogether discouraging was simply the result of my very depressed state of health at the time. The position into which the subject has now been lifted is therefore wholly due to Mr. Galton through his large development of the study, and his exquisite and costly methods of demonstrating in print the many new and important conclusions he has reached.

I take the opportunity, in reference to a late article on Anthropometry (in the *Nineteenth Century* of September 1894, p. 365), to deprecate, as being to the best of my knowledge wholly unproved, the assertion that the use of finger-marks in this way was "originally invented by the Chinese." I have met no evidence which goes anywhere near substantiating this. As a matter of fact, I exhibited the

system to many passengers and officers of the P. and O. steamship Mongolia in the Indian Ocean, during her outward voyage in February 1877; and I have the finger-prints of her captain, and of all those persons, with their names. It is likely enough that the idea, which caught on rapidly among the passengers, may have found a settlement in some Chinese port by this route, and have there taken a practical form; but whether that be so or not, I must protest against the vague claim made on behalf of the Chinese, until satisfactory evidence of antiquity is produced.

Littlemore, November 7

W. J. Herschel

【資料④－１】

April 13th, 1896

Dear Mr. Minakata

It is not very easy to answer your question without knowing the context of the expression and the exact meaning of the whole sentence.

We speak of the "heroism" of any man, no matter of what class, who courageously risks or sacrifices his own life for the good of others or for the good of his country. The man himself we call a hero. Thus, Kusunoki Masashige was a hero and so was the shopkeeper Amagawa Gihei in the "Chushingura", just as much as Yuranosuke himself and the ronin. A man who rose against the rich and powerful on behalf of the poor and weak, we might call a "popular hero" or a "champion of the people," "champions of the oppressed" or "champions of the poor and weak." If he was an obscure person who made himself companies in this way, we might call him a "village Hampden" after Hampden, who rose against the oppressions of Charles I. Again we might speak of a "man of courage and public spirit" no matter of what class he might be. "Public spirit" signifying devotion to the interests of the community and a desire for justice for all. We speak, too, of "magnanimity" or a "magnanimous man." The word "magnanimity" means literally, as you can see from its Latin root, greatness of mind or greatness of soul. It is not to imply a combination of manly virtues, such as generosity, fairness and justice even to an enemy... bravery. We speak, too, of a "man of mettle" meaning a man of courage. Also of a man of fortitude, or a man devoted to some good cause. Perhaps you will be able to select one of these phrases to suit your meaning with the help of an English dictionary.

If you cannot get an exact English equivalent perhaps you might use the Japanese word in italics, and explain its meaning, either in the text or in a foot-note. Then for the rest of the article, you could use the Japanese word and it would be understood.

Perhaps, at your lessons you would fully translate what I have written below. Do you mind? The sentences are on some Kakemono I have, and I have translated what I can but do not know it all.

Yours very truly

Arthur Morrison

【資料④－ 2】

June 3rd, 1897

Dear Sir,

I am sorry to hear that you will be unable to lunch with me tomorrow, but of course your first duty is to your lord. If I can in any way assist you in finding what you are looking for, of course I shall be very glad to do so, if I know whether the Marquis Tokugawa intends staying in this country for a long or a short time, and whether he wishes to live in London. I know nothing of any suitable family at present, but perhaps I could make enquiries, if you are still unsuccessful. Please let me know if I can help you in any way.

Yours very faithfully,

Arthur Morrison

K Minakata Esq.

【資料④－ 3】

October 4th, 1898

My dear Sir,

I have delayed replying to your letter because till today I was uncertain of my movements for this week, as well as being busy. I find now that I must be in London every day of this week after today, so that this time I fear I shall not have the pleasure of meeting you. Perhaps I shall be more pertinent on another occasion.

I understand nothing of mycology myself, but there are certainly many fungi in Epping Forest. There is a small walk which I would recommend you to get in—N. Baxton's "Epping Forest" prices a shilling—nine pence at the discount booksellers. It is a very complete guide to the Forest with excellent maps and informations on every subject, including the fungi.

Trains leave Liverpool Street about every half hour throughout the day for various stations about Epping Forest. The most convenient of the stations would be Chingford or Loughton. I have seen many fungi in a wood class by Chingford Station—the wood that bounds the open plain that lies almost before you, but just to the right, as you emerge from Chingford Station. In buying your return ticket at Liverpool Street, take care to tell the booking clerk that you are returning the same day; he will then sell you a ticket at a much cheaper rate. The journey occupies from a half to third quarters of an hour, according to the train you catch.

Yours very truly

Arthur Morrison

Minakata Kumagusu sama

【資料④－ 4】

October 20th, 1898

Dear Mr. Minakata,

Thanks for your letter about your kind explanations about Yemma. I expect to be in London tomorrow (Thursday) and will look for you at the Museum after 3 o'clock.

I am writing to the South Kensington Museum people as to translations.

Yours very truly

Arthur Morrison

【資料④－ 5】

December 29th, 1898

Dear Mr. Minakata,

I enclose a first draft which I think will be the wisest form of appeal to the Trustees. I did not before understand that you had already sent them the letter I saw. I have omitted all reference to your dispute about the sneeze, partly because I think it better to say as little as possible about matters bygone, but chiefly because your argument is more clearly and simply enforced by citation of the two occasions on which you did precisely the same thing, mainly complain of people talking, with the result when the superintendent was present, that your complaint was attended to, and with these occasions, when his assistant was in charge that you were expelled. This method shortens and strengthens the argument, and avoids any confusion with earlier matters.

I think I have got it right this time, anyhow.

Yours faithfully

Arthur Morrison

P. S. I thought it best to say an English friend revised the letter, because otherwise they would not understand the difference of style in the two letters.

M

【資料④－ 6】

May 17th, 1899

Dear Mr. Minakata,

I hope I do not trouble you too much by asking you if you will kindly add translations to the signatures I have copied in the enclosed card, and let me have them at your convenience. I can read some of the characters, but not all. The one at the top left hand corner is from a drawing of the Kano school; the one to the right from one of the Chinese school; and both at the bottom are from a drawing of the Shijo or Oki school.

Yours very truly

Arthur Morrison

【資料④－ 7】

Loughton, June 13th, 1899

Dear Mr. Minakata

(1) Your letter in Nature in regard to finger marks is perfectly intelligible and clear to any intelligent Englishman.

(2) The summary of your letter in the accompanying pages is not well done. It is not well compressed, because many important considerations are omitted, and the meaning is missed in more than one place. Here I may say parenthetically that I can see why the mistakes have occurred. They do not arise from any lack of clearness in your writing, nor from any intentional unfairness on the part of the other man. The fact is, I can see very plainly that he is a foreigner — perhaps a German — and his knowledge of the exact degrees of meaning of English words is inferior to your own; consequently, when there exist, two words of somewhat but not exactly similar meanings, he fails to perceive the difference, and he humanly uses either without perceiving his error. An Englishman can always detect the writing of a foreigner whose knowledge of the language is imperfect, by such accuracies as these.

(3) I can see no mixing up of any two things in your letter; and it seems to me that you only cite the matter of chiromancy in order to prove that the Chinese had given attention to finger-furrow at a very early period, and that, in that connection they had supposed, and perhaps observed that the marks remained permanent throughout a man's life. Certainly you say nothing at all of the value of finger-lines in regard to chiromancy. The mixing up is on the part of the commentator. Perhaps you might have better guarded against hasty misinterpretation by saying that "although chiromancy has nothing to do with the question at issue, still the fact of "etc. etc. etc. continuing as you did. But this was not really necessary, for, as I have said your meaning is perfectly plain to an educated Englishman.

Your distinction between the meaning of "perceive" and "conceive" is quite correct, and quite plain. The word "valuable" has the tendency you suppose, and there is some slight chance that a reader might think, as you say, that if you used the word, you believed in the practice of chiromancy. But an intelligent Englishman would see that the whole summary was clumsily expressed by a foreigner, and so would not regard exact meanings in reading it, perceiving that the writer was ignorant of them.

A sever term for such a misinterpretation of your meaning would be "perversion." In this particular case, as I have explained, it was unintentional, and due to ignorance and haste. But if it had been deliberate and intended you might use a stranger term still, and call it a willful perversion of your argument. This would be very strange indeed, and only to be justified by obvious hostility and bad faith on the summariser's part. To say "a careless perversion" would also be severe, but not so much as "willful perversion." A gentler term would be "unintended perversion" or "unwitting perversion."

Yours very truly

Arthur Morrison

P. S. I perceive some side notes on your letter. The best way to write the sentence you speak of is;

"The Japanese person has, or at least I myself have, a psychological trust," thus giving each clause its proper verb. It would be improper to use one verb for both, because the first clause is in the third person, and the second in the first person.

【資料④－ 8】

July 12th, 1899

Dear Mr. Minakata,

I have been away from home, and only just now see your letters.

As soon as I can make time I will examine your translations carefully. As far as I can see by a hasty glance they seem to be less carefully phrased than your letters to Nature. In English literature novels and stories take a very high place, and every possible literary excellence is imported to the writing. But I will look more closely at them the moment I can get a little leisure.

Yours faithfully,

Arthur Morrison